

# 学生生活の満足度を決定する要因 — 学生生活状況調査データの分析

岸岡 洋介<sup>1)</sup>, 山内 一祥<sup>1)</sup>, 泉谷 道子<sup>1)</sup>, 平尾 智隆<sup>2)</sup>

1) 愛媛大学教育・学生支援機構 特定研究員

2) 愛媛大学教育・学生支援機構 講師

## The Determinants of Student's Satisfaction with Campus Life: An Analysis of College Student Survey Data

Yosuke KISHIOKA<sup>1)</sup>, Kazuyoshi YAMAUCHI<sup>1)</sup>  
Michiko IZUMITANI<sup>1)</sup>, Tomotaka HIRAO<sup>2)</sup>

1) Research Fellow, Institute of Education and Student Support, Ehime University

2) Senior Assistant Professor, Institute of Education and Student Support, Ehime University

### 1. はじめに

「大学の使命は研究であり、教育は二の次である」という言葉に示されるように、新制大学の成立以後、日本の大学は研究重視・教育軽視の姿勢をとってきた<sup>1)</sup>。

しかし、わが国の大学進学率は戦後一貫して上昇を続け、トロウのいうマス段階からユニバーサル段階へ移行しようとしている。短大や高専への進学もあわせると高等教育への進学率は50%を超え、日本の高等教育はすでにユニバーサル段階に突入しているともいえる<sup>2)</sup>。18歳人口の半数が高等教育を享受するという社会環境下では、大学には研究のみではなく、教育と学生支援を充実していくことが必然的に求められるようになる。

そのことを示すかのように、中央教育審議会は2008年12月、「学士課程教育の構築に向けて」を答申した。そこでは学士課程教育の構築が我が国の将来にとって喫緊の課題であるという認識の下に、学位授与、単位制度の実質化、教育方法の改善や入学者選抜など現在の大学が抱える様々な問題の改善が指摘されている。

加えて、文部科学省は近年、国立大学の法人化をはじめとする大学運営システムの改革、設置認可の弾力化や第三者評価制度の導入にみられるような大学の質保証のための制度改革、「国公私立大学を通じた大学教育改革の支援」（いわゆるGP）など優れた教育活動への重点的支援の取り組みを推進してきた。GP等の取り組みが端的に示すように高等教育政策は、これまでの科学技術政策の一部から脱却し、文字通りの教育政策の色彩を強めてきている。

その一方で、高等教育政策が急激に変化している中ではあるが、当の大学は、経営の安定という生存をかけた問題に直面している。少子高齢化による18歳人口の減少に加えて、高等教育のユニバーサル化が教育の質の低下の誘因となっており、大学教育の実質化と教育責任の明確化は、大学経営と結びつく極めて重要な課題となってきた。マクロレベルで推し進められる教育政策は、大学の教育改革を通じてその対象となる学生に到達する。その意味では、ミクロなレベルで変化する学生のあり様を何らかの指標を用いて評価することで、その政策と改革の意味、そして学生のニーズが初めて明確になろう。

そのような問題意識に基づき、本稿では、教育政

策の評価指標として、また当の大学の教育改革の成果指標として考えられる学生生活の満足度の分析を行う。秦(2009)が「退学率が非常に低い大学でも、卒業後の満足度が低ければ安泰とはいえない。一方、退学率は必ずしも低くなくても、卒業生や退学者の満足度が高い場合は、その大学のファンやサポーターとなり、口コミ広告や近親者への推薦につながる」と指摘するように、学生の大学に対する満足度の向上が大学の抱える問題を解消する1つの方策になりえるものと思われる。

学生生活の満足度は、学生のニーズと教育改革・教育政策との距離を押し量る重要な指標である。そのような考えに基づきながら、次節以下では、大学生の学生生活満足度の決定要因を分析することで、その距離、すなわち教育改革の方向性の検討を行っていく。

なお、本稿の構成は次の通りである。続く第2節では、先行研究を整理し、本稿の分析課題を明確にする。第3節では、調査概要とデータの説明を行い、第4節で学生生活状況調査の個票データの分析から学生生活の満足度の決定要因を明らかにする。第5節はまとめである。

## 2. 先行研究と本稿の課題

これまで大学は「象牙の塔」といわれ、一般社会から隔絶し、孤高を持する存在であった。開き直れば、研究重視・教育軽視の風潮は世間が認めていたということもできる。

しかし、前節でも述べたとおり、現在大学には、学生の視点に立った教育や学生支援の整備が求められている。このような状況下においては、教育サービスの受給者である学生がより良い学びを得るために、大学はいったい何を提供できるのか、あるいはどのような施策を強化すれば良いのかを見極めていく必要があるといえるだろう。

さて、これまでの日本における学生の「満足度」研究を概観してみると様々な研究が存在することがわかる。浜島(2005)は、大学入学時における志望大学入学の成否と在学満足度の関係を切り口とし、在学満足度を高める要因分析を行っている。その中には、第1志望で入学した学生の方が在学満足が高く、いくらかの例外はあるものの、第1志望ではなかった学生が高い在学満足へと至る過程には様々な

困難があることが明らかにされており、そこから不本意入学者への対応の重要性が指摘されている。

また、西田(2005)は、入試偏差値によって大学を3つに分類し、入試偏差値ランク別に大学満足度の検証を行っている。そこでは、入試偏差値ランクの低い大学では、友人関係の良好さが大学満足度に正の影響を与えていることが指摘されている。また、ハード面・ソフト面という視点からも分析がなされており、「授業の満足度」などのソフト的な要因の方が大学満足度と深くかかわっていることが明らかにされている。

溝上(2004)が指摘する近年の学生の勤勉化、大学回帰の傾向を学生の大学に対する意識・消費生活との関係において検討したのが佐野(2005)である。佐野(2005)は、学生の勉学志向、大学へのコミットメントが強まっていること、また消費生活において、教養娯楽費・勉学費などの支出が多い学生ほど学生生活に充実感があることを述べている。これらの背景として、女子学生比率の増加や家庭の経済的援助による「ゆとり」が挙げられており、更なる学生生活充実のためには経済援助の拡張に加え、正課外の教育機会やアルバイト、サークル等を含めた学生の多様なキャンパスライフをより詳細に検討する必要があるとも指摘している。

さらに武内・浜島(2005)は、21大学を設立年、偏差値、学生数、総合大学・単科大学等の基準によって「伝統総合大学」「中堅大学」「新興大学Ⅰ」「新興大学Ⅱ」の4つに分け、それぞれの群に属する学生の特性や大学生活にどのような差異があるのかを調査している。その中では、授業や人間関係、大学の施設・環境への満足度などが比較されているが、新興大学の学生よりも伝統総合大学の学生の満足度が高いこと等が指摘されている。

また本田(2002)は、大学生活における満足度を、学生の外部にある環境の構成要素に対する受動的・客観的な評価として捉え、学生生活の質を問題にする場合には自らの主体的な参加の度合いに関する評価をも内包した、より総合的な指標でもある「充実度」に焦点を当てる必要性を説き、それがどのような変数によって規定されているのかを分析している。本田(2002)は、大学生の中で誰の「充実度」が低く、それはどのような理由によるのかについての検討を行い、充実度を高めるための対策としていくつもの指摘を行っているが、最終的に、「進学率

の上昇とともにますます多様化の度合いを高めている日本の大学生を一枚岩として捉えることはできず、その『多様性』をリアルに把握するための試みが、いっそう必要とされている」(p.124)という。この指摘は、武内ら(2005, p.28)の述べる、各大学の持つ特質の違い、それ故に各大学の学生にあった学生指導や教育支援策を講じる必要性の指摘に通ずるものがあり、この種の研究では、それぞれの大学に固有の問題を把握する試みが見過ごされてきたことを示している。

近年の大規模な大学生調査としては、山田(2007)が行った「日本版大学生調査(JCSS)」や東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターが行った「全国大学生調査」、Benesse 教育研究開発センター(2009)が行った「大学生の学習・生活実態調査」が挙げられる。これらの調査研究は、大学生総体としての学生生活の実態把握としてはおおいに役立つものであるが、上述の通り、それぞれの大学ごとの特質を考慮に入れた分析がまだ十分には行われていない。

以上から、大学生の満足度について、特に各大学の特質を考慮した研究が十分に蓄積されていないことがわかる。愛媛大学の学生生活状況調査の個票データを用いた分析を行うことで、この点についての貢献を試みるのが本稿の狙いである。以下、何が愛媛大学生の学生生活の満足度を決めているのかを分析していこう。

### 3. データ

#### (1) 調査概要

本調査は、愛媛大学生の生活状況を把握し、「学生中心の大学」における学生支援を構築するための基礎データを得ることを目的に、学部(法文学部・教育学部・理学部・医学部・工学部・農学部・スーパーサイエンス特別コース)に在籍する全学生を対象に行われた<sup>3)</sup>。

調査票は、前期の成績表配布の時期(2007年9月下旬)に学務チームより学生生活担当教員に手渡され、成績表配布時に学生生活担当教員が学生に配布した。回収は締切日(2007年10月19日)を設けて、学生自身が各学部の窓口(学務チーム)に提出する方法をとった。回答は無記名となっている。8,198通の調査票を配布し、1,684通の回収を得た。回収率は20.5%である。

#### (2) 分析に使用する変数

分析に使用する変数とその記述統計量を表1に示した。変数の取捨選択については、探索的・試論的な意味もあり、学生生活の満足度を説明するのに影響がありそうだと考えられる変数を可能な限り拾い出し、分析に使用することにした。

奨学金受給や学費免除は経済支援の、サークル・ボランティアは課外活動の、朝食は生活習慣の、アルバイトは経済活動の代理指標として考えられる変数である。

表1 分析に使用する変数の記述統計量

変数名	変数の内容	度数	平均	標準偏差	最小	最大
男性ダミー	(男性 = 1, 女性 = 0)	1682	0.49	0.50	0	1
奨学金受給ダミー	(受給あり = 1, なし = 0)	1678	0.42	0.49	0	1
学費免除ダミー	(免除あり = 1, なし = 0)	1661	0.11	0.32	0	1
悩みダミー	(悩みあり = 1, なし = 0)	1648	0.72	0.45	0	1
サークルダミー	(所属あり = 1, なし = 0)	1647	0.66	0.48	0	1
ボランティアダミー	(経験あり = 1, なし = 0)	1648	0.29	0.45	0	1
通学時間	(分)	1673	16.72	17.57	7.5	165
朝食ダミー	(食べる = 1, 食べない = 0)	1666	0.77	0.42	0	1
アルバイトダミー	(経験あり = 1, なし = 0)	1616	0.82	0.39	0	1
進路希望ダミー	(希望がある = 1, ない = 0)	1660	0.84	0.36	0	1

## 4. 分 析

学生生活の満足度を被説明変数に、表1の各変数と学部・学年のダミー変数を説明変数にとり、推定を行った結果が表2である。学部ダミーにおいては教育学部を、学年ダミーにおいては4回生を基準グループに設定した。その理由としては、それらのグループが学生生活の満足度の質問項目において「満足」「まあ満足」と答えた者の割合が一番高く、他のグループとの有意差を観察しやすいと考えたためである。

推定①では、学生生活の満足度を聞いた質問項目において、「大変満足」「まあ満足」を1、「どちら

ともいえない」を欠損処理、「やや不満」「不満」を0とした被説明変数を作成し、ロジスティック回帰分析を行った。この推定では、「どちらともいえない」を除外することによって、満足か否かを決定する要因は何かを探ることが目的となる。

また、学生生活の満足度に関する質問項目（大学の設備、キャンパスの環境、交友関係、大学生協、学生生活、それぞれの満足度）について主成分分析を行い、合成変数として新しい満足度変数を作成した。その合成変数を被説明変数として重回帰分析(F検定の有意確率を10%に設定したステップワイズ法)を行ったのが推定②である。大学の施設や生協、友人関係の満足度は、学生生活に関わる重要な項目

表2 学生生活の満足度を決定する要因

	推定①		推定②	
	係 数	標準誤差	係 数	標準誤差
男性ダミー	-0.791 ***	0.231	-0.594 ***	0.074
学部				
法文学部ダミー	-0.653	0.403		
教育学部ダミー	ref.		ref.	
理学部ダミー	-1.025 *	0.449		
医学部ダミー	-0.726 +	0.434	-0.200 *	0.098
工学部ダミー	-0.413	0.429		
農学部ダミー	-0.503	0.553		
学年				
1回生ダミー	-0.318	0.356		
2回生ダミー	-0.747 *	0.305	-0.364 ***	0.092
3回生ダミー	-0.451	0.289	-0.253 **	0.087
4回生ダミー	ref.		ref.	
5回生ダミー	-0.773	0.496		
奨学金受給ダミー	0.133	0.214		
学費免除ダミー	0.175	0.339		
悩みダミー	-2.023 ***	0.378	-0.542 ***	0.081
サークルダミー	0.524 *	0.218	0.187 *	0.078
ボランティアダミー	0.200	0.238		
通学時間	-0.008	0.006		
朝食ダミー	0.457 *	0.229		
アルバイトダミー	-0.256	0.281		
進路希望ダミー	0.363	0.260	0.169 +	0.102
定数項	4.501 ***	0.699	0.632 ***	0.139
サンプル数	1,196		1,464	
LR chi 2 (19)	91.66			
Prob > chi 2	0.000			
Pseudo R 2	0.117			
F 統計量			17.58 ***	
Adj R-squared			0.074	

注：+は10%，\*は5%，\*\*は1%，\*\*\*は0.1%水準で有意なことを示す。

であると思われる。自分自身の生活満足度（学生生活の満足度）だけではなく、それを取り囲む環境についての満足度を足し合わせることで、総合的な学生生活の満足度の決定要因を探ることがこの推定の目的である。以下では、この推定②の結果を基に議論を進めていく。

まず、コントロール変数については、男性ダミー、医学部ダミー、2回生ダミー、3回生ダミーが負で有意という結果になった。女子学生に比べて男子学生は満足度が低い。そして、教育学部生に比べて医学部生は満足度が低い。学部ダミーについては、推定①をみると理学部ダミーも負で有意となっており、理系学部で満足度が低い傾向が読み取れる。

同様に学年ダミーでも、推定①をみると2回生ダミーが負で有意となっている。このデータはクロスセクションデータであるので、正確にその意味を理解するならば、調査時点の2007年において、その時の2回生は4回生に比べて学生生活の満足度が有意に低いということであり、まず考えられる解釈は、2006年度の入学生がもつ世代効果である。すなわち、不本意入学の割合が高かった等の理由により、その入学年度生に固有の効果があり、このような結果になったとする解釈である。

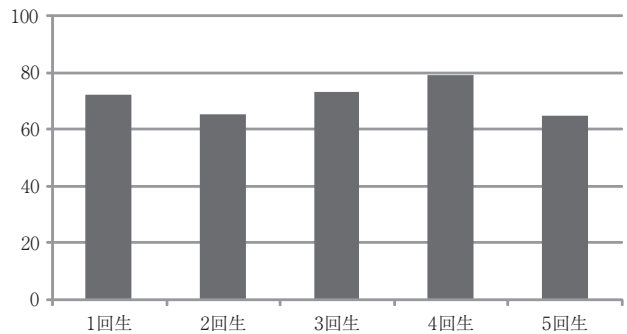
しかし、その一方で、満足度の変化を学年による連続的な変化と仮定すると、その意味は少し違ったものになる。すなわち、学生の満足度は2回生時に一度落ち込み、その後回復し4回生で最高点に達する（留年をすればその後落ちる）という解釈になる（図1）。2回生という時期は中だるみや社会的な成人への移行過程など心理的に不安定な時期であり、何らかの原因が考えられるが、この点については、上記で述べたデータの性質上からも仮説的な提示にとどまるものである。パネルデータの整備を行い分析していかなければならない残された課題である。

その他、投入した変数で有意になるのは、悩みダミー、サークルダミー、進路希望ダミーである。悩みがない学生に比べて悩みがある学生は、学生生活の満足度が有意に低下するということがわかる。サークルダミーについては、符号が正であるので、サークルに所属している学生は所属していない学生に比べて学生生活の満足度が有意に高いということになる。また、進路希望が明確な者ほど、学生生活の満足度が高まることもわかる。

これらの分析結果は、学生の悩みを解消するため

の学生支援（例えば、学生相談体制の充実など）とサークル活動への支援が学生生活の満足度改善に寄与できることを示しているといえよう。さらに、将来の希望が明確である方が満足度は高く、学生生活の目標設定やそのきっかけを提供するキャリア教育の重要性を指摘できる。

図1 学年別の学生生活満足度



注：「満足」+「まあ満足」と答えた者の割合

## 5. ま と め

本稿では、愛媛大学生の学生生活に対する満足度を高める、または低下させる要因を把握することを目的とし、データ分析を行った。主な結果は以下に挙げる6つに要約される。

第1に、女子学生に比べて男子学生は満足度が低いという結果がある。これについては、国立・私立大学81校の学生対象に行われた別の調査でも同様の結果が出ている（全国大学生生活協同組合連合会2007、2008）。予測できる要因の一つとして、専門学校や短期大学などの多くの選択肢の中から4年制大学進学を選択した女子学生が持つそもそもの積極性が考えられないだろうか。

第2に、理学部生と医学部生の満足度が教育学部生に比べて低いということについては、基礎的な科目を着実に積み重ねることが求められるという選択幅の狭さや、それにより授業以外の大学生活の充実に意識を向け難いという、両学部におけるカリキュラムの特性との関連性が推測される。

第3に、2回生は4回生に比べて満足度が低いという点に関しては、2回生時は、1回生時にあった周囲からの注目や支援がなくなり、現実が見え始める時期ということが関係しているのかもしれない。さらに、ゼミなどの専門的小集団にはまだ属さない

ため、教員との交流も多くなり大学コミュニティへの帰属意識を持ち難い時期といわれる<sup>4)</sup>。Graunke and Woosley (2005) の指摘にもあるように、2 回生に特化した学習・生活・キャリア支援などの充実を図る必要があるのかもしれない。

第4に、悩みのある学生の満足度の低さは、当然予測できる結果だが、学内には学習・生活面など、様々な悩みに対応する複数の相談窓口がすでに存在している。ただ、学習や生活に支障をきたすような悩みを抱える学生のうち、実際どれだけの学生がそれらの窓口を訪れ支援を求めることができているのかという点に関しては、データの制約上、分析ができない。この点については、相談窓口の効果測定という意味でも、更なる調査が必要になってくる。

第5に、サークルに所属している学生は、所属していない学生に比べ満足度が高いということを鑑みれば、更なるサークル活動への支援とサークルに属さない学生がサークル活動に出会う機会の拡大などを講じることも必要になってくるといえよう。

第6に、進路希望が明確な学生は満足度が高いという結果がある。この点については、学生が早い段階から進路について考え、気軽に相談をもちかけることができる先輩や教職員との関係作りができる機会の増大をキャリア支援策として考えていく必要があるだろう。進路や大学生活に関する悩みを持つ学生の意思表示を待つサービスではなく、学生の願いや意識の変化に気づくことができる場や機会の創出が必要なのではないだろうか。

最後に、残された課題を述べて結語とする。以上の指摘は、あくまで1大学の調査結果によって導かれたものであり、学術的な一般化には慎重でなければならない。学年の経過とともに、満足度がどのように変化していくのか、その変化に影響を与えている要因は何か、これらについて知るためには追跡調査(パネル調査)を企画しなければならないが、現時点では残された課題となる。

## 注

- 1) 北野 (2006, p.3) を参照。
- 2) 2009年の学校基本調査(速報)によれば、4年制大学への進学率は初めて50%を超え、50.2%となった。短期大学への進学者を含めた進学率も56.2%と過去最高を更新している。志願者に対する入学者の割合は92.7%に達している。

3) なお、スーパーサイエンス特別コースについては、サンプル数が1であったため分析からは除外した。

4) Schreiner and Pattengale (2000) や Graunke and Woosley (2005) を参照されたし。

## 引用文献

- Benesse 教育研究開発センター (2009) 『大学生の学習・生活実態調査報告書』 研究所報 Vol. 51, 株式会社ベネッセコーポレーション。
- Graunke, Steven S. and Sherry A. Woosley (2005) "An Exploration of the Factors that Affect the Academic Success of College Sophomores," *College Student Journal*, 39(2), pp. 367-376.
- 浜島幸司 (2005) 「大学類型別にみる大学生生活満足－在学を満足させる／させない要素とは」 武内清編 『学生のキャンパスライフの実証的研究－21大学・学生調査の分析』 科学研究費研究成果・中間報告書。
- 秦敬治 (2009) 「IR 数値はこう読み解く (第1回退学率)」 『Between 2009春号』 進研アド。
- 本田由紀 (2002) 「学生生活が充実していないのは誰か」 『全国大学生生活協同組合連合会「学生生活実態調査」の再分析』 SSJ Data Archive Research Paper Series No. 23。
- 北野秋男 (2006) 『日本のティーチング・アシスタント制度－大学教育の改善と人的資源の活用－』 東信堂。
- 溝上慎一 (2004) 『現代大学生論－ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』 日本放送出版協会。
- 西田亜希子 (2005) 「大学における友人関係」 武内清編 『学生のキャンパスライフの実証的研究－21大学・学生調査の分析』 科学研究費研究成果・中間報告書。
- 佐野秀行 (2005) 「学生の消費生活の推移と学生生活の充実要因に関する一考察」 神戸大学大学教育研究センター 『大学教育研究』 第13号。
- Schreiner, Laurie A. and Jerry Pattengale eds. (2000) *Visible solutions for invisible students: helping sophomores succeed*, National Resource Center for the Freshman Year Experience and Students in Transition, South Carolina University, Monograph Series No. 31.
- 武内清・浜島幸司 (2005) 「ユニバーサル化時代の大学生の生活と満足度－大学類型による分析」 武内清編 『学生のキャンパスライフの実証的研究－21大学・学生調査の分析』 科学研究費研究成果・中間報告書。
- 山田礼子編 (2007) 『転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する国際比較研究』 科学研究費研究成果報告書。
- 全国大学生生活協同組合連合会 (2007) 『第43回学生の消

費生活に関する実態調査報告書』全国大学生生活協同組合連合会。

全国大学生生活協同組合連合会（2008）『第44回学生の消費生活に関する実態調査報告書』全国大学生生活協同組合連合会。